

柳田国男年譜に見る地名への視座

—柳田国男・山口貞夫・松永美吉を結ぶ線—

小田 富英

一、はじめに

柳田国男が、早い時点から地名に注目し、『地名の研究』（古今書院、昭和十一年）を始めいくつかの論考に、独自の地名論を発表してきたことは周知のことである。しかし、大方の評価は、方言や民俗語彙の収集の枠内に収まってしまつて、自らの学問の中核として持続したとは言えないとされている。本稿の目的は、そうした通説に対しての再検討と、柳田民俗学にとつて「地名研究」とは何であつたのかを問うた今号の特集に伝える点にある。柳田の年譜のなかに脈々と流れる地名研究への情熱を抽出するだけでなく、柳田の遺志を受け継いだ人々にも光を当て、今後の地名研究の方向と課題を探りたいと思う。

二、柳田年譜のなかの地名関連事項

はじめに、現在作成中の柳田国男新年譜『柳田国男全集』別巻「に所収予定」のなか

から、地名関連の事項を抽出してみたい。

明治三八（一九〇五）八月、妻孝と共に、長野・群馬の温泉巡りの旅に出て、峠や地名への関心がつのる。

同 九月一〇日、福島県での視察旅行の帰路、宇都宮に立ち寄り、平石村の柳田地名を尋ね当てるが、村役場で「柳原新田の略」と言われ、しよげかえる。

明治三九（一九〇六）年八月六日、新潟・長野・群馬の視察旅行で、前年の旅でも考えた「田代 軽井沢」などの地名の問題に改めて気付く。

明治四一（一九〇八）年一月一日、法制局の先輩、上山満之進宅を訪れ、名字の話などをする。

明治四二（一九〇九）年一月二日二五日、自宅での会で、小田内通敏や矢田部一家に地名の話をする。

同 三月、『後狩詞記』を自費出版。

同 五月二九日、視察で立ち寄った木曾王滝村で、岩が露出しているところを土地の人たちは、「ゴウロ」と呼んでいることを知り、「強羅」や「香呂」地名を思い出す。

同 八月一六日、全国の五万分の一の地図が全部揃う。

同 十一月三日、伊能嘉矩宛ての手紙に、「ジャクジ」について山中共古と書簡をやりとりしていることや、韓国の民俗や古韓語を知らなければ地名を調査できないと書く。

この頃、一年かけて内閣文庫にある明治一七年前後の内務省地理局作成の「字名集」を閲覧し、六千余りの字地名を書き写す。

明治四三（一九一〇）年二月二日、東京帝国大学山上御殿で開かれた地理学会で、「地名の話」を講演する。また、『歴史地理』二月号から「地名雑考」の連載を始める。この月、「峠に関する二三の考察」で「タワ・タワ・タワリ」の地名を論ずる。

同 三月、喜田貞吉に宛てた手紙を、「神籠石に關係する地名」として発表する。

同 五月、『石神問答』を刊行する。またこの月、『遠野物語』の序に、「小字よりさらに小さき区域の地名は、持主にあらざればこれを知らず」と書く。

同 九月二六日、「福良、袋、富士、風戸」の原稿を脱稿する。

同 十一月七日、「強羅」を脱稿する。明治四四（一九一一）年二月一八日、伊能嘉矩宛ての手紙に、悪路王と鮑土、戸戸、阿久津などの地名との関連に興味があると書く。

同 四月一三日、「矢立峠」を脱稿する。

同 一〇月、南方との往復書簡で唐干の意味を尋ね、教示を得る。

明治四五（一九一〇）年六月一四日、地学協会例会で、「日本に於ける地名に就て」を講演する。

同 七月九日、「鍛田、峠をヒヤウといふこと」を脱稿する。

大正二（一九一三）年二月九日、「平ナカ」を脱稿する。

同 三月、「郷土研究」創刊号の「紙上問答」で、大唐米や赤米、トボシなどと呼ばれている米についての情報を求める。

同 五月二〇日、「タテ 常陸の下館」を脱稿する。

同 九月二〇日、「八景坂」を脱稿する。

大正三（一九一四）年二月八日、「新潟及び横須賀」を脱稿する。

同 三月二三日、「新潟及び横須賀（完）」を脱稿する。

同 七月、「大唐田又は唐干田と云う地名」と「天神に因ある地名三」を発表する。

大正四（一九一五）年一月、「垣内の成長と変形」のなかで、垣内研究の重要性を指摘

する。

大正五（一九一六年）五月、この月発行の『郷土研究』に、即位礼参列の帰路の紀行文「丹波市記」や「高見山近傍の口碑」を発表し地名の由来を説く。

大正七（一九一八）年九月、東条操が「地形を表す方言」を発表し、異論をもつ。

同 一月、大阪講演のついでに、信楽から宇治田原に入り、車夫との会話で「田原」と「多羅尾」が混線していたことを発見し、様々なことを考える。

大正二二（一九二三）年暮れ、帰国後、九月の大震災で東京帝国大学に寄託されていた膨大な『子名集』が焼失したことを知る。

大正二四（一九二五）年一月一〇日、親戚の桑木殿翼の娘と、寺田寅彦門下の松澤武雄の結婚式に招かれ、寺田寅彦と会う。宴席での話に、地名の話が出て「シマ」とは部落の意味と述べる。

大正二五（一九二六）年九月、兵庫県にある「紫合」と書いて「ユウダ」と読ませる地名についての質問を載せる。

昭和五（一九三〇）年四月二八日、松本女子師範学校の彰風会で、「地名の話」を講演する。

昭和六（一九三二）年二月一六日、東大地理学教室で開かれた日本地理学会例会で、

「地名の話」を講演する。

昭和八（一九三三）年一月二五日、池上隆祐らの努力で岡書院から『地名の話その他』が刊行される。

同 七月、文部省普通学務局編『郷土教育講演集』に「地名の研究」の講演記録が収録される。

同 一〇月二五日、豊橋の狭間小学校で開かれた愛知県教育会、豊橋市教育会連合主催の郷土研究講習会で「地名と歴史」を二時間にわたって講演する。

昭和一一（一九三六）年一月一八日、山口貞夫に編集を任せていた『地名の研究』が、古今書院から刊行となる。前年の二月に書いた「序」で、「此書の弱点を指摘せられる読者の、出来るだけ多からんことを熱望して居る」と述べる。

同 四月一七日、小倉郷土会で講演を発表する。

同 一〇月、「アテヌキといふ地名」を発表する。

昭和一二（一九三七）年六月、魚津の郷土史研究者から、「野方」地名についての質問が届き、返事として「野方」解を発表する。

同 一二月、「橋の名と伝説」を発表し、「シアンバシ」や「エンキリバシ」等を列記し説明する。

昭和一四（一九三九）年九月七、一四日、小倉行き予定を、門司の松永美吉に速達の葉書で伝える。（松永については後述）

昭和一七（一九四二）年一月、野村伝四の「さらぎ考」から刺激を受けたとして「和州地名談」を発表し、国名と同じ大和の大字名を数多く紹介する。

昭和一八（一九四三）年一〇月、前年亡くなった山口貞夫の遺稿集『地理と民俗』の「序」を書く。

昭和二三（一九四七）年九月一五日、「折口信夫君とニホのこと」を書く。この月、農林省総合農業研究所の依頼を受け「カイトの研究」を始め、「カイト」地名などの調査項目を決める。

昭和二三（一九四八）年三月一三日、日本民俗学研究所第三三回例会で垣内の話をする。九月、『民間伝承』に「垣内の話」として発表する。

昭和二四（一九四九）年五月一九日、奈良女子高等師範学校で、「大和と日本民俗学―垣内の話―」を講演する。宮本常一が記録をとる。

昭和二五（一九五〇）年四月、「榎戸懐古」を書き、唐木田や登戸の地名を論ずる。

昭和二六（一九五二）年一月一七日、青森の森山泰太郎に、津軽の沿岸に「ラク」か

「ロキ」の語尾をもつ地名があるか尋ねる葉書を書く。

同 二月二日、水海道に住む人から何と読めばよいのかと質問がきたので、「ミツカイドウ」と読むべきと長文の手紙を書き、「水海道古称」として発表。のちに国語教科書に収録する。

昭和二七（一九五二）年五月一日、上野博物館講堂で開かれた第六回九学会連合大会で「海上生活の話」で、尾張の「年魚市潟（アユチガタ）」地名に触れる。

昭和二八（一九五三）年一月、『稲の産屋』（『新嘗の研究』所収）を発表し、「丹生」地名を丹土の採取地と解釈する傾向を批判し、ニホ・ニフ・ニューの産屋から考えた

いとし、折口信夫が「新嘗」を「ニヒ」「ニフ」の「忌み」と説いたことを紹介する。昭和二三（一九五八）年、「故郷七十年」の聞き書きのなかで、「地名の研究」や「センゾクという所」について語り、『神戸新聞』に発表する。

三、年譜に見る地名への視座

以上見てきただけでも、柳田の地名への関心が一貫していることは明らかである。それだけでなく、「垣内」だけとつても、学問的な

進化が遅々としていることがわかり、地名研究の難しさに改めて気付く。柳田自身、『地名の研究』の「序」で次のように述べている。

地名は数千年來の日本国民が、必要に応じて追々に且つ徐々に制定したものである。其趣意動機の千差万別であるべきことは始から誰にでも判つて居る。それをアイヌ語ならアイヌ語の、たゞ一側面ばかりから説かうとすれば、仮に論理は誤つて居ないにしても、尚脱漏があり又強弁があることは免れない。私の地名解は年数が永いだけに、自分の知識の色々の段階が干与して居る。或時は旅行で得た直覚、又ある時は方言や口碑の比較の間からも暗示を得、中には又文庫の塵の香の、芬々と鼻を撲つのも無しとしない。前後に幾多の態度の矛盾があるが、それは又地名發生の至つて自由なる法則とも相応して居る。

前述の柳田年譜の地名事項からも、柳田のその時々々の地名解釈が、「旅」によるものなのか、「口碑伝承」の研究成果によるものなのか、「文献資料」によるものか、さまざまな段階にあることは一目瞭然である。さらに、柳田言うところの「態度の矛盾」をそこに見出したときに、私たちは地名研究の面白さをも体得で

きるのである。

さらに柳田は、自分の一生を回顧した聞き書き『故郷七十年』において、「私の学問」を語るうえで、きちんと「地名の研究」を位置づけていることを忘れてはならない。それだけでなく、初出の『神戸新聞』の二百回連載を見れば、地名について語っている回は、「地名の研究」だけではなく、「センゾクという所」「ダシの風・アイの風」「麦つき唄から」「アエノコト」「ヨネ・コメ・クミ・クマなど」「日本人の渡来」などいたる所に散りばめられていることがわかる。さらに興味深いことは、その地名を引用する箇所が、「海上移住」や「稲作 穀霊信仰」「祖霊信仰」といった晩年まで未決の課題として抱え込んでいた論のなかにあることである。例えば、「麦つき唄から」や「ヨネ・コメ・クミ・クマなど」には、次のような文章がある。

じつはこのオヤとかイヤという問題が、日本人の民間信仰、ひいては民族の起源にまで遡る重要なことなのである。つまりイヤという地名を全国的に調べてゆくと、先祖の霊を祭る場所は別に人家の近くに置くという両墓制度の習慣にもかかわって来るのである。

クメという地名が日本全国に割に広がっているのも、お祭のクメ、つまり神聖な稲を作る所ということではないか。つまり各地のクメという地名をたどれば、日本人の歩いた一通りの所が分るのではないかと思うのである。

この時の柳田の手元には、五十年以上も昔に、内閣文庫から借りた「字名集」から書き写した六千に及ぶ「字地名」のカードがあったはずである。柳田民俗学樹立前で、郷土研究黎明期の努力が、民俗学の最後の課題を示そうとした晩年に報われたかのようなのである。そう考えると、柳田民俗学における「地名研究」の位置づけは、もつと早く、もつと大きく評価されてもよかつたのである。

四、地名研究の志を継ぐ

―松永美吉の場合

(一)柳田国男と山口貞夫

にもかかわらず、柳田が「日本民俗学」への宿題として残した「地名研究」は、個々の能力に頼る学問としてしか継続してこなかつたと言つてよい。谷川健一の孤高の学問がその代表だが、それ以前にも、都丸十九一や千葉徳爾など柳田を継承する学問的なチャンス

はいくらでもあつたはずである。どうして、その流れが大河とならなかつたのかは、別の機会に回すとして、ここでは、山口貞夫の存在への指摘から始めようと思う。

前述の年譜事項からもわかる通り、『地名の研究』の編集を任された山口が、柳田の期待を一身に浴びながら、三十四歳の若さで亡くなつたのが、昭和十七年のことである。柳田は、山口の遺稿集『地理と民俗』の「序」に次のように書いている。

山口君は勇敢なる旅客であると同時に、最も精励なる書齋の闘士であつた。人と会するの日は耳を、途を行くときは目を主力として、多く知り少しく語り、内に生命の促進を感じつゝも、強ひて功程を急がうとする風が見えなかつた。恐らくは学問の帰趨が彼には夙に明かであつて、前人後人が此の如く相助け、積み上げ、ゆりならした基礎の上に建つものが、まことの完成であることを信じて居たからであらう。どうか我々もその素直な信頼に、背かぬやうにしたいものと念じて居る。

東京帝国大学地理学科で辻村太郎に師事し、地理学と豊富な実地踏査の「基礎の上」に、民俗学との接合として地名研究を位置づけて

いた山口の存在は、柳田にとって民俗学の未
来そのものであったに違いない。

(一) 門司の松永美吉

柳田国男と山口貞夫を二人の師として、地名研究の志を継いだ人物に、松永美吉がいる。松永美吉は、明治四二年長崎に生まれ、海難審判庁に勤める傍ら、民俗学を学び、昭和九年、曾田共助を中心にできた小倉郷士会の若手会員として柳田国男と出会った人物である。昭和十年、出来たばかりの民間伝承の会に入会し、『民間伝承』第二号の「新入会員紹介」に、「門司 松永美吉」の名が載る。会長の曾田らの入会よりも早く、福岡県からの入会第一号であった。

その松永宛ての柳田国男の書簡や葉書が、公開されたとの新聞記事が載ったのが、平成九年のことであった。松永が亡くなった次の年のことである。『柳田国男全集』の書簡編に掲載させていたかどうかと、当時の編集委員会から話題となっていたのである。ようやく、書簡編の準備にかかることになった一昨年、私は、全集担当の編集者と共に、小倉を訪れた。葉書は、残念ながら数は少なかつたのであるが、柳田が、昭和十一年、十四年、十六年と三度にわたって小倉を訪れ、小倉郷士会に大きな期待を寄せていたという事実を知る

ことができた。年譜作成上の貴重な資料も、たくさんいただくことができたのである。とくに、十四年は、山口と松山の高等学校での講演の合間をぬつての小倉入りであった。松永美吉宛ての葉書は、その時のもので、出発前に、門司海員審判所の松永宛てに速達で出したものである。松永は、その知らせを受けて、曾田会長の指示で、山口高等学校まで迎えに行つたという。また、十六年には、小倉の朝日新聞社講堂での講演で、若き松本清張が聴いていたとの指摘も受けた。現地を訪ねなければわからないことが数多くあることに改めて気づかされたのである。

そして、私なりの実感は、柳田と若くして出会つた松永も、松本も、そしてもう一人、書簡が見つかった木島甚久も、柳田の影響を受けて、その後の人生を送っているということであった。松永は地名研究、松本清張は民俗学(地名、方言も含む)を背景とした推理小説、木島は家船研究においてである。(松永宛て葉書二通、木島宛て書簡一通、曾田共助宛て葉書一通、馬渡兄弟宛て葉書二通は、次回配本の『柳田国男全集』第三六巻に収録予定。お世話して下さった馬渡博親小倉郷士会現会長、りゅう雅人氏に多謝。)

(二) 松永美吉の山口貞夫との出会い

民間伝承の会が発足し、各県からの会員募集に応え、福岡県からいち早く名乗りをあげた松永美吉であったが、最初から地名研究を志していたわけではなかつた。旧制中学時代に『海南小記』と出会って以来、柳田の著作が出る度に愛読していたという松永が、地名研究に目覚めたのは、山口貞夫の影響が大きいとのちに述懐する。この述懐について触れる前に、山口と小倉郷士会との関係を先に紹介しなくてはならない。

山口は、柳田のもとで昭和九年から始まる山村生活調査の主要なメンバーとなり、豊前京都郡伊良原村の調査に入るようになる。小倉郷士会の人々と出会うことになるのは、柳田の最初の小倉入りのすぐあとのことである。そして、小倉郷士会の機関誌『豊前』第六号に「山仕事〜京都郡伊良原村」を載せるのである。

この時すでに山口は、前述のように、柳田国男の『地名の研究』の編集を任されるほどの人物として名が通っていた。松永が、自分と年も変わらぬ山口から大きな刺激を受けたことは容易に想像できる。

(四) 松永美吉の

『地形名とその周辺の語彙』

平成二年四月二十一日、川崎市総合自治会

館で開かれた「第九回全国地名研究者大会」において、松永美吉の長年の地名研究の成果であった『地形名とその周辺の語彙 上・下・補遺』全三巻(上巻 平成元年二月一日刊、下巻 補遺 平成元年十月二十日刊)が、日本地名研究所地名研究賞として表彰された。

同書の「はじめに」は、「本書は、山口貞夫(経歴略)の『地形名彙』に触発されて成ったものであるから、その緒言の全文を左に掲げて敬意を表したい」として、山口が雑誌『地理学』昭和十年四月号、五月号に連載した「地形名彙」の「緒言」から始まっている。その「緒言」のなかで今回引用しなくてはならない点は、次の一節である。

本名彙の多くが、曾て柳田国男先生の発表したものゝに拠る事、尚その後先生から貴重な地名カードの借覽を許された事は幾重にも感謝する所である。(略)

尚将来も新しい語彙の発見はあるであらうが、その数は著しく大きいものとは思えない。

山口が柳田から借りたという「地名カード」とは、前述した明治十七年の「字名集」からの抜き書きカードであったのであろう。柳田の山口への期待が、いかに大きかったかがよくわかる。

また、松永は、山口が将来的にも「その数は著しく大き」くはならないはずだと述べたことに對して、自分の欲張った採録の結果、本書のようにかなりの数が増加したと誇らしく述べている。さらに続けて、松永は「地形名」の定義として、次の三点に分類できると述べ、なぜ「周辺の語彙」としたのかの説明を加えている。

①自然地形名(これは説明するまでもない)
②人工(人為)地形名田、畑、道路、屋敷、堀など)
③抽象地形名ニライカナイ、チクラガオキ、ヒロシマ、ミヤコ、セケンなど)

さらに本書は、地形名だけでなく、気象(風位名を除く)、天象、海象等、生活環境に関する語彙をも併せて採録したので、タイトルを『地形名とその周辺の語彙』とした。

松永の全三巻、一四一五ページに及ぶ同書が地名研究賞に相応しいものと推薦する理由が日本地名研究所に残されている。推薦人は、選考委員の根本順吉である。要約すると次の通りである。

一、今や手に入れ難い古典となった山口氏の名彙をそれぞれの項目にカッコ付きでふくませ、さらにこれよりはるかに多く積み重ねられたこと。

二、地名民俗学として豊かな内容で読み始めたら止められないほどのものであること。
三、地名研究の基礎的集大成として貴重であること。

四、本書は地名についての膨大なアンソロジーであること。

そして最後に、「研究書を越え、啓蒙書としてもすぐれている」ので、索引をつけて刊行するようにと根本は結んでいる。

その根本の提言は、それから四年後の平成六年に実現し、三一書房から『民俗地名語彙事典』上下二巻として刊行されたのである。

この時の『日本地名研究所通信』第九号(一九九四年七月一日)の巻頭言において、谷川健一は次のように書いている。

第九回全国地名研究者大会で地名研究賞を受賞した松永美吉氏の私家版『地形名とその周辺の語彙』に大幅に加筆増補した『民俗地名語彙事典』上下二冊がこのたび完結、三一書房から刊行された。私どもはそれを心から喜びたい。

地名辞典は吉田東伍の『大日本地名辞書』

にとどめをさすが、これは地名を項目とした地域別の地誌のおもむきを呈している。

戦後はいくつかの五十音引きの地名辞典が刊行されているが、歴史や民俗の知識のとぼしい執筆者によるものであり、一つとして信用できるものがない。それらは誤った解釈を讀者に押しつけひろく害毒を及ぼしている。本格的な地名辞書の編纂が急がれるゆえんであるが、その先駆として本書が刊行された。本書は半世紀を優に超える松永氏の今期と執念の賜物であり、私たちはそれを享受する機会にめぐりあわせたことを、著者にふかく感謝したのである。

それから二十年余り経過した今、「柳田民俗学における地名研究」の特集のなかで、若くして柳田に出会い、その影響でこつこつと積み上げてきた松永美吉の「地名民俗学」の再評価を試みることは意味あることと思う。その一助として、松永の『地形名とその周辺の語彙』のなかから、柳田も『後狩詞記』において着目した「コバ」地名を紹介してみたい。

コバ 四国山地、九州山地で焼畑。雑穀栽培型が中心になっているが、ムギ類やイモ類の栽培もウエイトを占めている（佐々

木高明・日本の焼畑）。

畑をコハ、コバと発音する場合には、焼畑、切替畑を意味するものが多い。山村では独特の焼畑耕作が行われ、「コバ作り」「コバサク」などと呼ばれている。こういうところに山地の新開拓地である「園」とか「木場」とかの地名が生れる（山口恵一郎・地名の成立ち）。

山間の地に開いた畑。長野、熊本、鹿児島種子島（全国方言辞典）。

山地利用の農作地をコバと呼ぶのは、九州では普通のことだ。「木場すなわち木を伐らぬと行えない農作の意」ではないか（分類農村語彙下）。

ここまでならば、単なる辞書的な集計で、便利なものを作っただけの評価で終わるのであるが、松永の努力はここからである。なかには、次のような「NHKラジオ第一」の放送や、自身の聞き書きによる情報までもが採録されている。

熊本県五ツ木村でもコバヤキ（コバ作）サクのために伐った木を焼くこと、コバ作がある（昭五三・四・二六NHKラジオ第一）。

山口県でも山中の小平坦地で、木材をこ

こに伐り出して貯めることをコバ出しという（松永美吉採取）。

長崎県上五島宇久島では、段々島の斜面をコバといい、斜面側の島の端の畦はダマとっている（出地出身者談）。

「コバ」の項目だけでも、二ページに及ぶが、松永は、これで満足はせずに『補遺』においても次のように書き加えている。

◎コバ 木場、小葉、古場、小庭の字をあてるが、中には「畑」の字で畑地であることを表してコバと読ませたものもある（人吉市の大畑サシ、とか内畑サシ、など）コバに畑を当てたのは、その実体を表したもので畑といえ、焼畑が主であることを暗示しているといえよう。コバの畑名は九州に多く小部落の地名が多い。九州以外の諸地方にも広く散在する。地名として単独の木場のほか今木場、木一、稗一、梶一、木場山など。（略）

『後狩詞記』（宮崎県椎葉村）で、イレソダ（入袖）というのを、熊本県人吉市日野地方ではコバという。焼畑または旧焼畑の跡がはっきりしていて、山林区域に対して袖状に見えるところ。

また『後狩詞記』にシナトコというのを

人吉市日野地方ではコバアトという。大豆、小豆、ソバ、ヒエなどを焼畑の内で叩きおとし収納をした跡。猪は落穂などをあさりにくる。畑跡。収納床。

長崎県下では、山間の製材場、木コリ場、炭焼き場のあるところをコバといい、このような僻地に暮らして都会の醸成に通ぜず、負けん気を出して、独り合点の理屈ばかりこねる人のことをコバトウジンといい、長崎市民は、軽べつするより持てあますのである〔長崎方言 ばつてん帳〕。

この松永の努力を知ったら、山口や柳田はどれだけ喜んだであろうか。

松永は、『下巻』「あとがき」に次のように書き、二人の学恩に応えている。

一、昭和十年、山口貞夫の『地形名彙』から五十数年を経た今日、やっと辿りついてこの始末である。存命ならば、私より丁度一ツ年長の在天の山口氏が、これを悦んでくれるかどうか。

一、柳田先生には、数多くの『分類民族語彙集』があり、十年毎にこれを増補すべしと述べられたようだが、これが実行されたためしはさらさら無い。淋しい限りである。

五、おわりに

特集のなかで、何か書くことになった時に、まず浮かんだことは、私が現在作成中の「柳田国男年譜」のなかから、「地名」に関連する事項を並べてみようということであった。そこで気づいたことは、柳田自身が言う、旅と口碑と文献による「地名解」への鍵の発見で、その時々によって、成果もあれば、矛盾もあるという地名研究の奥深さであった。

また、柳田国男、山口貞夫、松永美吉を結ぶ線を意識できたことも、今後の柳田研究や地名研究の課題を提供できたのではと自負している。また、誌面の都合で、小倉調査については論文の体をなしていないが、松永美吉と同じような存在の木島甚久と合わせて、いずれ詳述したいと思う。

『柳田国男全集』編集委員